グラスに
冷たいギミックを
kuresaki
from cage

　千佳がその店を訪れたのは初めてではない。ただ、隆行が接客するのは初めてだった。
「どうも、たっくです」
　挨拶代わりに、トランプを一枚取り出し、ぽっと燃やして名刺に変える。隆行はこのマジックバーでは幼顔であることも手伝って、人気が高い。「わあ！」と千佳は、まるで初めて見たかのように喜んだ。千佳の笑顔に隣の男が微笑む。
「チカちゃん、かわいい」
　男は千佳の髪を撫で、もっと見せてやってよ、と促す。その前に隆行はドリンクの注文を受ける。自分にモスコミュールと彼女にスクリュードライバーを、と男が言う。この店では接客するマジシャンとは別にバーテンダーがいて、お酒も軽食も、下手なバーよりよっぽど美味しい。すぐにモスコミュールとスクリュードライバーが運ばれてくる。
「オレンジジュースみたい、おいしーい」
　千佳が弾んだ声を上げる。隆行は彼女が何度も、いわゆるレディーキラーカクテルを飲んでいるのを見ている。毎度毎度、隣にいるのは別の男だったが。
　隆行はトランプマジックを二種類行い、男が五百円玉を差し出したのでそれを借りてトランプの中に消し、男のグラスの底から出現させた。マジックが成功するたびに、千佳は明るい声で、えー、とか、なんでぇ、とか反応を返した。こういうお客が隆行は好きだ。演じていて楽しいから。
　話を織り交ぜながらマジックは続き、男はジントニックを三杯、千佳はスクリュードライバーを二杯飲み干していた。酔ったのか、千佳の顔からふっと笑顔が消える。隣の男からは見えない角度で。思いつめたように隆行の手を見つめる。そして男に寄り掛かりながら言う。
「ねえ、ちょっと眠くなってきちゃった」
　その表情とはかけ離れた甘えた声だった。
「じゃあ、チェックを」
　男がにこにことカードで支払いを済ませ、千佳を抱きかかえるように店から出ていった。千佳は、上半身を男に預けてはいたが、その足取りはしっかりとしたものだった。無論、男は気付く様子もなかったのだけれど。
「ホテルだぜ、きっと」
「だろうな」
　グラスを片付けに来たバーテンダーのケンが言うと、隆行も返した。特に興味はなかった。早い時間だが店は程々に混んでいて、さっきまで二人がいたカウンター席はすぐ、女性の二人連れで埋められた。隆行は笑顔で再びトランプを燃やす。

2

　千佳は最近地元で流行の自然食レストランチェーンの役員をしている。大学時代の女友達とその彼氏に誘われて会社を立ち上げた。千佳は栄養士の免許を持っている。その資格が使われることはほとんどないのだけれども。
　はじめは二件のレストランを切り盛りしていたが、思っていた以上に女性客の反応がよく、チェーン店とした。今はレストランが四店、カフェが三店、ベーカリーショップが一店、と展開している。どれも評判だ。
「千佳ちゃん、ねね、新しいメニューの試作ができたらしいから、お昼はその試食会だよー」
　副社長の聡子が、おっとりとした雰囲気とともに話しかけてくる。言われて、千佳は九月に変わったばかりの卓上カレンダーを見る。金曜日は試食会の日だったことを千佳はうっかり忘れていた。今日は一一月メニューの試食だと聞いていた。
「あ、そうだったね。楽しみ。今日もビシッと文句付けてあげるわ」
　二人であはは、とおおらかに笑い合い、千佳はペットボトルのミネラルウォーターを飲んだ。試作品に関する千佳の発言力は、この会社ではとても大きい。どの指摘も的確で、一度社長の黒木がこれはどうしても出したいと千佳の意見を無視して出したメニューは大コケにコケた。千佳のアイデアでそのメニューは改良され、今ではレストランの定番メニューとなっている。それ以来、黒木も千佳には絶大な信頼を寄せている。もちろん、ビジネスパートナーとして。黒木と千佳は、プライベートではあまり話したことがない。聡子は元々から千佳を慕っていた。黒木から飲食関連の会社を立ち上げると聞かされたとき、聡子はどうしても千佳を入れるべきだと口添えした。カフェの一件目が軌道に乗ってから聡子と黒木は結婚したので、それからもう三年になる。黒木も聡子も、昔に比べるとかなりふくよかになった。子供は居ない。千佳は聡子が定期的に婦人科に通っていることを知っている。不妊治療ではなく、おそらくはピルの処方のために、ということも。こんな話はしたこともないけれど。

「結婚とか考えないの？」
　時々、聡子は千佳に訊く。千佳は決まって、
「理想が高すぎてなかなかいい人に出会えませんねぇ」
　とおどける。
「そっかぁ。もてそうなのにねぇ」
聡子も大して重く考えているわけではないので、そこでその会話は終わる。話のきっかけが欲しいだけなのだ。聡子には主婦の友達があまり居ない。結婚した女友達は子育て真っ最中で、気軽にちょっとお茶でも、というわけにはいかないらしい。千佳が見る限り、聡子は話したがりの甘えんぼさんだ。悪い意味でなく。そんな聡子は愛らしいし、守ってあげたくなる。そして千佳は時々、聡子みたいだったらよかったのに、と自分のことを思う。千佳の体型は大学時代のまま維持されている。

3

　試食会で千佳の毒舌が飛び出ることはなかった。きのこのサラダは油を少し抑えてビネガーを多めにかけることで栄養のバランスが素晴らしくなると千佳は判断したし、鶏肉のハンバーグは中に入ったヒヨコ豆がとても良いと太鼓判を押した。ただ、メニューとして出すには少し味のパンチが足りないので濃厚なソースにすることを提案してみた。リンゴのデザートも酸味を残してさっぱりとしたタルトにすることでパイのように重くならず、これはこのままメニューに加えてもいいんじゃないかなと思えた。一つだけ、一口付けただけで却下となったメニューがあるが、そのスープは栄養学的に見て塩分が高すぎたし、少し味がくどかった。毒舌は飛び出さなかった。千佳が毒舌を吐いたことなど一度もない。

午後六時を回り、千佳は帰り支度を始める。オフホワイトのチュニックワンピースにグレーのスラックスという仕事着に、ダークグレーのロングカーディガンを羽織るだけだが。黒い革のトートバッグに飲みかけのミネラルウォーターを入れ、化粧ポーチを持って洗面所にいく。化粧直し。マキアージュのコンパクトを開きファンデーションの崩れたところをパフで押さえ、淡いピンクの口紅をぷるりとなじませる。千佳自身も自覚しているが、化粧の加減によってはまだ二十歳そこそこに見えないこともない。ショートボブの黒髪を手櫛で撫で付けて洗面所を後にする。デスクに戻るとポーチもバッグの中に入れる。

「お先に失礼します」

オフィスの鍵を閉めるのは黒木夫妻の仕事なので、笑顔で挨拶をしたら、速やかに仕事場を後にする。

今夜はどこのバーにいこうか、と千佳は腕時計を見ながら考える。千佳は基本的に夕食をとらない。平日はそのまま帰宅し、紙パック入りの安いロゼワインを小さめのグラスに二杯飲んで、本を読んだり音楽を聴いたりしてから眠る。だが、今日は週末、金曜日だ。最近のお気に入りは繁華街の少し外れたビルに入っているマジックバー。しかし、一人で入るのも気が引けるし時間が早い気がする。その前に適当に「今夜の相手」を見繕うべきなのかもしれない。週末の夜は一人で過ごすには長すぎる。繁華街へ通じる電車に乗るためにとりあえず最寄の駅へ向かう。駅の鏡を一瞥して気合が入りすぎていないことを確認し、改札を通り、ぼんやりと電車を待つ。寂しさで胸が締め付けられていることに千佳は気づいているが、それを表に出すのはスマートではないと思い込んでいるのも千佳だ。電車が来る。千佳と同じく仕事を終えたらしい人々と共に電車に乗り込んで息を殺す。混んでいる電車は自分が自分でなくなるようで、千佳はかすかにほっとする。電車はゴトゴトと街へ向かう。

　電車を降り改札を出ると、千佳は中央口のオブジェ脇のベンチに座った。電車の中では今夜どうするか決めきれなかったからだ。腕時計を見ながら、ぼおっと考えを巡らせる。タイミングがよければこうしている間に、いわゆるナンパ男から声をかけられてそのままその男に付いていくだけで時間が潰れるのに。なんてことも考えながら。週末の中央口は活気にあふれている。デートの待ち合わせだろう、一人で時計や携帯を見ている男女。この後飲み屋にでも向かうのだろう、男性の集団。わいわいと喧騒に溢れている。この瞬間が、千佳は一番苦手だ。早く今夜の予定を決めないと。早くこの場から離れないと。
　ちらりと千佳を見る男は何人かいたが、声をかけてくる者はいなかった。腕時計を見るともう七時近かったので、その場を離れることにした。大通りに面したビルのガールズバーへいこうと歩き始める。『チェリーブロッサム』というのがそのバーの名前だ。チャージは取るが、ドリンク自体の価格は安い。男性客と女性客の比率は半々くらい。女性客はグループであることが多いが、男性客はたいてい一人で来ている。一見さんが多い。何度もそこでナンパ紛いのことをしているので顔なんて覚えられてしまっているだろうが、今更気にしても仕方がない。『チェリーブロッサム』の良いところはバーテンダーの女性が、向こうから進んでは話しかけてこないことだ。話しかければちゃんと応えてくれるのだけれども。だから千佳はドリンクのオーダーとか清算とか、そういった内容以外で店員と喋ったことがない。そのほうが気楽で、良い。
　店に入るとカウンターは奥が三席空いていた。千佳はゆっくりと奥まで歩き端に座る。レッドアイを注文し、携帯を取り出す。特に気にしているわけではないが、占いのページを開いて自身の今日の運勢を見る。「恋愛運絶好調☆素敵な出会いの予感」と書いてあり、苦笑する。当たっても当たらなくてもどうということはない。すぐにレッドアイと、ガラスの器に入ったミックスナッツが供された。グラスに口を付ける。よく冷えている。トロリとしたトマトの甘みとほろ苦いビールが心地良い。
店内は女性客ばかり。入ってすぐのカウンター席の女性二人がバーテンダーの女性と話している。誕生日か何か祝い事なのだろう、シャンパンが出ている。彼女らの大声に、千佳は少し顔をしかめたが、グラスの中身を半分ほど飲み干すと、どうでも良くなった。
　ドアが開く。女性バーテンダーたちが声を揃える。
「いらっしゃいませ」
　サラリーマン風のひょろりとした男性客だった。店内を見渡して千佳の隣の席に座った。会釈を交わして、千佳はレッドアイに口を付ける。
　胸が大きく開いたシャツを着たバーテンダーの女性が男の前に紙のコースターとミックスナッツを置き、何にいたしましょう、と笑顔で言う。
「えっと、ウオッカトニックを」
　男は伝え、かしこまりました、とバーテンダーが離れる。男はこの店が初めてなのだろう、店内をきょろきょろと見渡している。小さくスムースジャズが流れる。
「この店、初めてですか？」

　千佳のほうから声をかけた。
「ええ、そうなんです。ちょっと興味があったもので」
　男は返してきた。照れ笑いのような表情を浮かべている。笑うと目が糸のように細くなって、さらに笑い皺も浮かんで、千佳は一気に男性に好感を持った。すぐにウオッカトニックが男に供された。笑顔のバーテンダーと話すより、男は千佳との会話を選んだ。千佳はラッキーだと思い、と同時に男の浅はかさを内心嘲笑った。男なんてくだらないわ。そんなことを考えながら表情には出さず、笑顔を作る。
「お酒はお強い？」
「いや、そんなには。飲み会ではビールばっかり飲んでますよ。詳しくもなくて」
「そうなんだ」
　千佳はふふっと笑い、レッドアイを飲み干す。次は何を飲もう。なんとなく炭酸が飲みたかった。
「すみません、アプリコットフィズ」
　バーテンダーに伝え、男に笑顔を向ける。煙草が吸えればよかったな、と時々千佳は考える。こうやってお酒が来るまでの半端な時間はどうやって過ごしたらいいか未だに良くわからなくて戸惑ってしまう。こうやって繁華街で飲むようになって何年になるだろう。
「アプリコットフィズって甘いんですか？」
「そうね、甘酸っぱい炭酸のお酒ですよ」
　と言っている間に目の前に、お待たせしました、とグラスが置かれる。
「飲んでみる？」
　くすっと千佳はイタズラっぽく微笑み、敬語を取り去る。男は気付いたか気づいてないか、千佳の顔を見る。
「いいんですか？」
　控えめに尋ねる。
「どうぞ。ちょっとだけよ？　私、飲むんだから」
「あ、それはもちろん」
　千佳はコースターごとグラスを男の近くにやり、肘をついて男がグラスに口を付ける様を観察する。男はゆっくりとグラスに唇を付け、目を閉じそっとお酒を流し込む。グラスはほんの少しだけ傾けて。本当にほんの一口だけ飲んで男はグラスを返してきた。
「ホントだ、甘い。あ、でも嫌いじゃないって言うか、好きかも」
　男が言う間も千佳は男の顔をじっと見ていた。にっこりと微笑んで。帰ってきたグラスを左手に持ち、男が口を付けたところから飲む。
「あ」
　男が声を漏らす。
「ん？　間接キスって？　わぁ、お子ちゃまぁ」
　くすくすと笑うフリをする。そうしたほうが場が暖まるから。男もつられて笑顔になる。半端な、つかの間の親愛。
「すみません、煙草、吸ってもいいですかね？」

男が問いかける。こういう問いかけはくだらない、と千佳は常々思っている。そんなこと千佳が規制することではないのに。男が少し手を伸ばせば届くところに重ねられた灰皿があり、違う席の客はチョコレートの香りがする煙草をもう何本も吸っている。くだらないことを訊かないでよ、そう思いながらも、どうぞ、と微笑んだ。微笑むというのは便利だ。何もかもが丸く収まる。

男は、ありがとう、と灰皿を一枚取り、上着のポケットからマイルドセブンを取り出した。水色のソフトケースの中から緑色のライターが出てきて、一本の煙草が取り出され咥えられ、男は手を添えて火を点けた。千佳はその様をずっと見ていた。アプリコットフィズのグラスに入れられた氷を上唇に感じながら。

男との話は弾んだ。ほうだと思う。千佳が振ったどんな話に対しても、男はよく喋った。最近見た映画の話や、好きな音楽の話、経済の話や芸能人のゴシップ話。よく喋る男だ、と千佳は思った。早く、そのよく喋る口から違う声を聞きたくて、男の唇を眺めながらそればかりを思う。男から話を引き出すには絶妙な相槌を打ってはいたが、振ったどの話も千佳には興味のないことばかりだった。男は一杯のウオッカトニックの間に煙草を二本吸い、おかわりをバーテンダーに注文した。千佳のアプリコットフィズは男の話の途中で既になくなっていたので、男が注文するタイミングでジンリッキーを頼み、男の話が進むうちに、それももう半分ほどが減っている。

「ね、このあとどうするの？」

ふと話が途切れた隙に千佳は訊いた。できる限りのさりげなさを装って。確かに誘いの言葉なのだけれど、あからさまでは良くない。さりげなく。向こうから誘いの決定打を導き出すための誘導。罠。駆け引きなんて相互のものではなく、一方的な、罠。冷静に慎重に、仕掛ける。

「そうだな、いいところ知ってるなら一緒にいきたいかな」

男が、片足、踏み入れた。

「いいところねぇ。当てがないこともないけど」

男が敬語を取り払っていることににっこり笑って、千佳はジンリッキーの残りに口を付ける。ここのお酒はどれも千佳には薄く感じられる。全然酔えやしない。酔うつもりもなく、軽いものばかり選んではいたのだけれど。一人で酔ってしまったら寂しくて寂しくて、もっとずっと果てがないほど寂しくなってしまう。だから。保証がないと酔うことなんてできない。

「じゃあ、ぜひ一緒に」

男はにこにこして、吸っていた煙草の火を消す。灰皿で火の点いた部分を折り、残った部分でざりざりと押しつぶす。煙が昇る。煙草を消した手がウオッカトニックのグラスを取り、男はぐっと中身を飲む。飲み干しはしなかった。四分の一ほどがまだグラスの中に残っているが、もう飲む気はないらしい。

千佳がバーテンダーに清算を頼むと、ご一緒にされますか、と返された。男が、ええ、と言いかけたのを遮るように千佳がはっきりと声に出す。

「いえ、別で」

　男の財布に用があるわけではないのだ。店員が金額を書いた青く小さい紙を千佳に見せ、千佳は紺色の財布から五千円札を一枚手渡す。男は取り繕うような笑みで、じゃあ僕も、と支払いを済ませる。お釣りを財布に仕舞い込み、財布をトートバッグに入れてから千佳は立ち上がる。既に席を立っていた男を見てイタズラっぽく小首を傾げ、女性バーテンダーに小さく、ごちそうさま、と言うと、ドアへ向かって歩む。男が並ぶ。
「いってらっしゃいませ」
　二人の背中にバーテンダーたちがと声を揃えた。ドアが開き、閉まる。キィ、パタン。
この店のバーテンダーたちは無駄話をしない。速やかに二人のグラスと灰皿が片付けられ、何事もなかったことになる。

　外はもう真っ暗だった。真っ暗といっても、飲み屋の看板はこうこうと街を照らしているし、行き交うタクシーのヘッドライトも眩しいほどではあるのだが。街を行き交う人は増えている。千佳が駅と反対のほうへ歩みを進め、男は半歩ほど下がってついて来る。繁華街の一番栄えているところを抜け、コンビニの前で立ち止まる。男の顔は戸惑いを隠せてない。この奥の細い道を抜けるとホテル街だ。
「ね、ホテルいこ？」
　男はあからさまにうろたえる。いや、とか、ええと、とか、何かごちゃごちゃ口ごもっている。千佳がもう一度言う。
「ホテルいこ？」
「ごめんっ」
　男は謝罪の言葉を口にした。そういうつもりじゃなかったんだ、とか、ごめんなさい、とか男が繰り返し言うので千佳は、罠には捕らえきれてなかったかともう気持ちは冷めてしまった。千佳が何も喋らないので男はずっと謝罪の言葉を繰り返し続ける。
「いいよ」
　千佳は笑顔を作る。
「ちょっと段階が早かったね」
　男に言うが、もちろん千佳自身に言い聞かせている。男は千佳の笑顔を見て少し落ち着いたのか、背を向け足早に歩き出した。少しすると人ごみに消える。男が見えなくなり、千佳はトートバッグからミネラルウォーターを取り出してごくごくと飲んだ。空になってしまったのでコンビニのペットボトル用ゴミ箱に入れる。
「ちょっと詰めが甘かったなぁ」
　一人こぼす。こんなこと、別に初めてじゃない。似たようなこと、しょっちゅうやってるから。けれど千佳が疑問に思うのは、なぜ男は謝るのか、ということだ。男は一つも悪くない。一つも悪くないのに謝るっていうのはどういう背景があるのだろう。そこがいつも不可解で、千佳の胸をざわざわさせる。
　喉が渇いた。今ミネラルウォーターを飲み干したばかりだけれど。コンビニに入って飲み物の棚を見る。エビアンは大きなボトルしかなく、ボルビックは売り切れていた。仕方がないので六甲の天然水を買うことにする。別にこだわりはないのだけれど、いつもはエビアンを飲んでいるのでいつもどおりの状況が欲しかった。体に良いとは聞いていても、硬すぎる硬水は少し苦手なので、あまり飲まない。棚にはコントレックスが並んでいる。
　清算を済ませてコンビニを出ると、千佳は街路樹の縁に座ってペットボトルを開けた。一口二口三口飲んで、右手のボトルをじっと見下ろす。別にラベルを読んでいるわけではない。このあとどうしようか考えている。
　考えていると目の前にストライプの入った黒いスラックスと革靴が立ち止まる。千佳が顔を上げると中肉中背の男が千佳を見ていた。

「いくら？」
　男が言う。こういうきっかけも初めてではないのだけれど、これまたいまだにどう返したら良いものか判らず、曖昧に笑う。男は千佳が商売ではない、と判断したのだろう。千佳の右隣に座る。ストライプのスーツはよく似合っていてお洒落で、千佳は男を都会からの出張者と判断した。
「ホテルいこうよ」
「悪くないわ」
　二人とも囁くほどの小声で二、三の言葉を交わす。喧騒にかき消されて二人以外に誰も聞くことはできない。小さな密約が結ばれた。二人は寄添ってホテル街へと踏み込んでいく。気に留める者は誰も居ない。気にするだけ無駄な場所だから。

　ホテルの敷地、道から見えない角度に入ると男は千佳の肩を抱きしめるように左手を置いた。途端に二人の身体は密接する。千佳の髪が男の頬に当たる、それほどの近さなのに二人は無言だ。無言のままエントランスを入り、男がタッチパネルで部屋を選ぶ。部屋番号が点滅し、無言のままエレベーターに乗り込む。男は左手を肩から撫でるように腰へとまわす。ぐっと二人は密着する。互いの息が感じられるほど。無言でぴったりとくっついたまま二人は五〇二号室のドアを開け、滑り込んでそれぞれ靴を脱ぐ。パンプスを脱ぐと千佳はコンパクトになる。イメージとして。五センチ。たった五センチだが、ヒールを脱いだ千佳は、普段の彼女と比較すると、か弱そうに見えるのかもしれない。相変わらず二人は無言で、男が先にもう一つの内ドアを開け、千佳の手を取り引き寄せる。引き寄せながらドアを閉める。抱きとめる。唇が触れ合う。離れる。無音。とさっ、と千佳がトートバッグを床に置き、それを合図にでもしたかのように、男が熱烈に千佳の唇をむさぼる。千佳は抵抗せず、弱く反応を返す。
　五分ほど、いや一〇分だろうか、続いていたキスが一旦、途切れる。一分だったかもしれない。なにしろ二人はキスが始まったときに時計を見ていない。キスが途切れたときに、千佳がふふふと小さな笑い声をこぼし、男がはっとしたように一瞬固まり、千佳を柔らかく抱きしめ直してふふふと笑う。
「ねぇ、お風呂入ろうよ」
　笑いながら千佳が言う。
「そうだね」
　笑いながら男が返す。
「服は自分で脱ぐ？　脱がしてあげようか？」
　男は千佳を抱きしめたままだ。耳元で囁く。
「ねね、名前、教えてよ。なんて呼んだらいい？」
　男の腕は力強くて千佳には簡単に外せない。そういう「男の力」というのは、脅威であり、けれど安心感もある。なにしろ今はその腕を拒む理由がない。頬を男の頬に押し当てて千佳は小さな声で返す。
「チカ。脱がしたい？」
「チカちゃんか、いい名前。俺のことはマコトって呼んでよ」
　男が千佳を強く抱きしめながら身体を揺らして笑う。強く抱きしめられて千佳が苦言を呈す。
「マコっちゃん、苦しい」
　ははははと大きく笑い声を上げ、マコトと名乗った男はごめんごめん、と腕を緩める。少し距離が開き、男の首もとからは甘く香水が香っている。千佳は香水をつけないし興味もないのでなんという香水なのかはわからない。けれどその甘さが心地よかった。
甘い、ということはつまり幸福感を呼び起こす。イチゴが乗ったショートケーキや、クリームがたくさん詰まったシュークリーム、油の乗った肉、比喩としても使われるではないか。甘い生活、とか。

千佳の意識は甘い香りに酔い始める。酔う。感覚と意識が分離し始める。お酒に酔ったときもそうだ。意識では、頭ではひどく冷静で冷酷であるほどなのに、感覚が、身体が勝手に反応する。そのギャップが苦しい。苦しいけれど、酔いの効果か芳しい痛みでもある。それはもう、ほとんど中毒と言って良い。
　結局二人はそれぞれに服を脱いだ。千佳はカーディガンをソファに置き、チュニックワンピース、スラックス、とその上に重ねてゆく。腕時計をテーブルに置く。男もスーツのジャケットを脱いでソファの背にかけ、こちらは先にスラックスを脱いでジャケットの上にかけてからカッターシャツのボタンに手をかける。千佳がピンクのブラジャーとパンティだけの姿になるとまた男が千佳を抱きしめる。
「やーだ、脱げないでしょ？」
　千佳は抵抗するわけでもないのに言う。男は無言で千佳の唇に自分の唇を押し当て、舌を入れてくる。男は煙草を吸わないのだろう、唾液が、甘い。男の手がブラジャーのホックをぱちりと外す。
　たとえば、今までのこの部屋の出来事を誰かが見たら、二人の関係というのはどう思われるのだろう。恋人同士、と見えるのかもしれない。千佳の意識が考える。それほどに男には優しい余裕がある。こういう時、男の多くはそのままベッドで、あるいはベッドにさえいかず行為に及ぼうとする。別にそれにさえ千佳は抵抗しないのだけれど。
　ブラジャーを外すと、男は「ちょっと待ってね」と急いでカッターシャツを脱ぎ、靴下を脱ぎ、アンダーシャツを脱ぎ、ボクサーブリーフを脱ぎ、全裸になった。男は腕時計をしていない。千佳もパンティを脱いでしまい、棚にあったバスタオルで前を隠している。
　男がにっこり笑って千佳の手を取り、二人はバスルームにいく。タオルを洗面台に放り出してバスルームに入ると、空気がひやりとした。全面ぼやけたクリーム色のタイルで埋められている。
「お湯、溜めよっか」
　男は千佳に言いながらバスタブに栓をし、蛇口をひねる。どばばば、と大きな音を立ててお湯が注がれる。男はしばらく出てくるお湯に手を流させて、お湯の温度をみているようだった。千佳はその間、腕で胸を隠すようにしながらバスルームのドアを入ったところで男の背中をぼおっと見ていた。広いがっしりした背中だ。昔なにか本格的にスポーツでもやっていたのかもしれない。そう思った。
「おいで？」
　男は濡れた手で千佳の手を取る。千佳はすんなり従う。バスルームの空気と同じで、床もひんやりとつめたい。男はシャワーを千佳に持たせ、蛇口をひねる。さあああっ、と水が出て、いや、すぐにお湯に変わる。男が蛇口を操作してはシャワーから出るお湯に触れ、そうこうしている間にバスルームは湯気でいっぱいになった。蒸気がしっとりと二人の身体に馴染んでいく。
「チカちゃん、熱くない？」
　シャワーを千佳の手から取りあげ、男がお湯を、繋いでいる手にさあああっとかける。千佳がこくりと頷く。男が手を引き寄せ二人が再び密着する。シャワーのお湯が千佳の肩に当てられ、反対の肩にも当てられ、男の胸を流し、千佳の背中を流れ、千佳は下腹部で男の一部が硬くなり

始めているのを感じた。けれど男は何もしない。ただ二人でゆっくりじっくり、そうじっくりとだ、シャワーのお湯を浴びる。時々そっと千佳の頬にキスをする。二人は無言。流れるお湯で二人は暖を取っているかのようだ。冷たいより暖かいほうが、熱いよりぬるいほうが、身体は敏感に純粋なそれそのものを受け止めることができる。男はシャワーをフックにかける。さあああっというお湯は男の背中が全部受け止める。千佳が後ろ向きに抱きとめられる。
「ね、ベッドいこう？」
　男が耳元で囁き、千佳は首をひねってその唇にキスをする。それが合意の合図だ。男が蛇口をひねってシャワーを止める。バスタブには七割ほどお湯が溜まっていた。先に千佳をバスルームから出し、男はバスタブのお湯も止めてからタオルを取った。二人は軽く身体の水気を拭き取ってからベッドへいく。
　先に千佳がベッドに腰掛けた。すぐ右横に男が座る。千佳が男の顔をじっと見る。その唇に男はキスをする。男の左腕が千佳の身体を抱きこむ。千佳は本当は横になりたかったのだけれど、男の腕は座ったままのキスを求めた。温まったせいか、男の香水が強くなった気がする。ココナッツのような甘い香り。千佳の意識が千佳の感覚から離れていく。男は千佳の唇から頬、首、鎖骨、肩と自分の唇を滑らせる。意識が離れた千佳の身体はそれに対して細かく反応を返してしまう。ほとんど条件反射として。男は千佳を抱え上げ、ベッドにそっと横たわらせる。そして千佳の身体を丹念に丹念に舐めていく。残ったシャワーの雫を舐め取るかのように。千佳は何か言おうとして、けれど何も言わずに声帯だけ細く絞った。漏れる声は甘えたあえぎ声のように聞こえる。広い部屋に千佳の息遣いだけがある。
「声、かわいいね」
　男は千佳の二の腕を舐めながら言う。やぁん、とだけ千佳は反論した。もちろんそれが反論と取られるわけは無いと思いながら。男は千佳の上半身をあらかた舐め終わると、千佳に覆いかぶさり、唇にキスをした。千佳は太腿で男のペニスが硬く硬くなっていることを感じる。感じながらねっとりとしたキスを交わす。唇を食み、舌を交じらせ、唾液を吸い、感覚のすべてが口に集中する。男も同じだ。千佳を押しつぶさないように身体の置き方には気を使っているが、千佳とのキスを目を瞑って楽しんでいる。男の注意はそれこそ舌と唇だけに集中している。長いキスのあと、男は身体を下げ、千佳のわき腹に唇をつける。千佳の身体はびくりと大きく反応した。
　意識がどんどん身体から離れる。それはまるで二人の様子を上からじっと観察しているかのようだ。千佳の意識は千佳自身の身体を観察する。じっと観察する。何か奇妙な生き物だ、と思う。そして健康的な身体の線だ、と思う。さらに、おかしな声を上げるものだ、とも思う。ふと、黒木と聡子はどんなセックスをするのだろう、と考える。聡子のあえぎ声を想像する。
「チカちゃん」
　不意に男が問いかける。
「ん？」
上ずった声で千佳が返事をする。
「何かスポーツとかしてるの？　すごくきれいな身体」
「特別何も」

　千佳は息を切らしながら伝える。学生時代にテニスサークルに入っていたが、それ以外にスポーツらしいスポーツなんてしたことがない。千佳の意識が考える。もし千佳の身体が健康的な美しさを持っているとするのなら、それは正しく健康的な食事しか取っていないからだ、と。普段から夕食は取らないけれど、朝食はまとめて作ったものとはいえ、きちんと栄養管理をしたものを食べ、昼もそれをお弁当に持っていって食べたり、品質管理と称して黒木のレストランで食べたりしている。黒木のレストランで出される料理はどれも千佳が栄養価を確認したものだ。しかしそれをこの場で説明するのは難しいし、大変に面倒だ。曖昧に答える。
「食事には気を使ってるかな」
　あえぎ声に近似の吐息で。
　男の唇はまだ千佳を舐め続ける。太腿、内股、膝、膝裏、すね。愛おしいものでも感じるように。いや、実際男には愛おしいのだろう。足の甲を舐め、指をしゃぶる。今度は上に向かって舐め進める。わき腹に口付けると千佳の身体がびくんと大きく反応するのでそれが面白いらしい。胸と腰をいったり来たりしながら何度もわき腹に唇が触れる。千佳は弱く反抗する。
「本当、きれいな身体。健康的」
「やだぁ」
「おいしそう。おいしいけど」
　男はまた千佳の顔に自分の顔を寄せる。
「ね、名前呼んで」
「ん？　マ・コ・ト？」
「うん」
　とまた唇が交わされる。今度は男の右手が千佳の身体をなぞる。触れるか触れないかの微妙なタッチで。千佳の身体はくすぐったいのか感じているのか、いちいち反応を返す。意識の千佳は本当に冷静にそれを見ている。男の唇が触れたところから千佳の輪郭が形成される。男が見ているのは感覚の千佳だ。ある意味この男の作品といって良い。触れる男の胸から強く早い鼓動を感じる。男も感極まっている。千佳の身体も準備はもうとっくにできている。この男のための身体。
「挿れていい？」
　男が小さな声で訊く。やっとだ。やっとの問いかけだ。けれど千佳は一呼吸置く。
「お口でしなくていいの？」
　男は、うん、と一度軽くキスをしてからコンドームを取り、スマートに装着する。男はもう一度訊く。
「いい？」
　小さく千佳が頷くと男は入ってきた。弱い圧迫感で千佳の意識が完全に身体から追い出される。上から二人の姿態を俯瞰する。奇妙に絡み合った生き物が動く。男は千佳の身体を健康的と言ったが、男の身体も、多少の脂肪は見て取れるが歳のわりには引き締まっているように思える。力強い筋肉の張りがきれいだと千佳は思う。
　入れてから、声を上げるのは男のほうだった。あ、とか、気持ちいい、とか、荒い吐息とともに漏らす。千佳の身体は強張り、男の動きに反応する。口からは細い息とも声とも取れる音が

漏れ、時折、マコト、と呼びかける。呼びかけに応じて男は千佳の唇に噛み付く。二人の息が荒く激しくなる。
　二人の身体とは対照的に、千佳の意識が冷静に考える。男が千佳の身体のことを「おいしそう」と言ったことについて。不意に千佳は「人肉っておいしいのかしら」と思いつく。どうだろう、おいしいだろうか。千佳の考えでは豚肉と似たような味なんじゃないだろうかと思う。千佳自身の肉はおいしいだろうか。食べてしまうにはちょっと可食部が少ない気がする。食べることができるところは、と考えを巡らせる。菜食主義者ではないので少し臭みのある肉かもしれない。茹でたらアクが出るだろう。栄養価はどうだろう。肉も野菜も果物もバランスよく食べる。ほぼ毎日少量の飲酒をする。たんぱく質は良質であるかもしれない。比較的健やかな肉だと思う。貧血になったこともないので鉄分も充分にあるだろう。飲酒のおかげで適度な柔らかさの歯ごたえかもしれない。女だから少し脂肪が多いかもしれない。けれどそれは脂が乗っていることになるのかしら。
　男の息が荒く、もうぎりぎりまできているようだった。
「もうだめ。いい？」
　男が問いかけ、千佳は、いいよ、とか細く返す。途端に男の動きは激しくなり、数秒の後、止まる。男は肩で息をする。千佳の上に崩れる。千佳は体内で男の痙攣するペニスを感じ、そこはかとなく優越感を得る。触れる胸からは早鐘を打つ心臓も感じる。男はそのまま右手で千佳の頬を撫で、口付けしようとする。しようとしたが、少し届かなかったので千佳の側から男にキスをする。舌は絡ませない。唇を食んだり吸ったりするだけの軽いキス。男の息はまだまだ荒い。千佳は左手をそっと男の背中にまわす。男は大きく一呼吸して起き上がり、つながっていた部分を外してからベッドの上に倒れこむ。顔は千佳のほうを向けて。
「気持ちよかった？」
　男が訊く。ふふふ、と笑ってから千佳は無言で頷く。千佳のほうから男に抱きつく。抱きつくといっても男はうつ伏せでベッドに倒れているので、身体を寄せて腕を乗せるくらいだが。男の頬にキスをする。男が首を動かし、その唇を自分の唇で捕らえる。上で見ていた千佳の意識が身体に入り戻ってくる。男とのキスがあまりに甘く感じるので身体が求めていたのはこれなのだ、と千佳は半ば確信する。男の背中を撫でる。意識が思ったとおりに手が動くので、さっきのおかしな生き物はなんだったのだろう、本当に自身の身体だったのかしら、と千佳はかすかに思う。男の背中はぐっしょり汗をかいていた。不快ではないので撫で続ける。
「ねぇ、口でしなくてよかったの？」
　千佳は訊く。男はくすくすと笑う。男が言うには舐めた口にキスするのがいやなんだそうだ。へえ、と思った。
「俺ね、キスするのが好きなんだ」
「うん、それはなんとなくわかった」
　くすくすと二人、笑いあう。男が身体の向きを変えて裸の千佳を抱きしめる。千佳は思う。ああ、男の腕ってこんなにも力強い。体力やその手のことで女が男に勝るのは難しい。普通にやりあったら敵わないだろう。そんな存在が自分にすがってくる。そのことで千佳は優越感を得る

。男という存在。敵対するとしたら脅威だが、包まれているとなんて安心なんだろう。気分が良い。男は千佳の髪に顔を埋める。二人の呼吸は荒い。

　先にバスルームにいくことを提案したのは呼吸が落ち着いた男のほうだった。千佳はずっとこの腕の中に居たくもあったが、泊まるわけではないのでそうはいかない。気だるげに上半身を起こす。男は先にベッドから降り、二人分のバスタオルを手に千佳の様子を見ている。にこにこしながら。
「チカちゃん、かわいいなあ」
　男が言うので、千佳はどんな表情を作ったものか悩む。笑っておけば良いのだろうか。男が寄ってきて千佳の頬に唇で触れる。
「かわいい」
　また、香水が、香る。微かに。男は千佳の手を取り、千佳はゆっくりとベッドから降りる。身体を男に預け、ゆらゆらとバスルームへ向かう。足を進めながら、女の扱いに慣れてるなあ、と思う。男の行動はあまりにもスマートだ。そして一かけらも千佳を不快にさせない。
　バスルームの入り口で千佳の身体を放し、男はバスタブの中のお湯を確認する。無言で小さく頷き、千佳のもとへ戻る。肩を抱き、バスタブへ誘う。ちゃぷん、と小さな音を立てて千佳の右足がお湯に浸り、左足も後を追う。そのまま千佳はしゃがみこむ。お湯は少しぬるめで、汗をかいた身体には心地良い。男は千佳の背中側からバスタブに入り込み、千佳を後ろから包み込むようにお湯に浸る。浸ったら千佳の首筋や耳に唇を這わせる。ちゃぷりちゃぷりと波が立つ。
「チカちゃんに会えてよかったなあ」
　男がしみじみ言うので千佳は吹き出してしまう。
「笑うことないだろ？　いい女に出会えて良かったって言ってるんだから」
こんなキザな言葉、千佳の耳にはこそばゆい。くすくすと笑い続ける。
「いや、だってさ」
　笑いながら応える。
「いい女はもっと身持ちが堅いのよ？」
「そうとは限らないな」
　即座に男は訂正し、千佳を抱く腕に力を込める。耳元で囁く。
「チカちゃん、いい女だよ」
そのまま耳を甘噛みする。「やぁん」と言いながらも、千佳は男にされるがままに任せる。
お湯はぬるいけれど、ずっと浸かっていると全身、爪の先から心臓を通って頭の天辺までぽかぽかと火照ってくる。指はもうしわしわだ。甘い言葉と甘い愛撫で溶けてしまいそうになる。このまま溶けてしまったら、と意識の千佳が身体の中で考える。難解な失踪事件だ。ばかばかしい、と思考をストップさせる。男は愛撫をやめない。

「ねぇ、もう熱くなってきちゃったよ」
　頭がぼんやりし始めた千佳が言う。男は愛撫をやめる。一度ぎゅうっと千佳を強く抱擁した。
「じゃあ、上がろうか」
　先に千佳を立たせ、すぐ男も立ち上がる。バスタブのお湯がざばりと音を立てる。バスルームの床の冷たさがひんやりと心地良かった。男がバスタオルを取り、千佳に渡す。千佳はゆっくりとゆっくりと身体を拭いた。男は対照的に、ざざっと勢いよくタオルを動かす。男が拭き終わっても千佳はまだ背中を一生懸命拭いていた。
「拭いてあげようか？」
男が言い、千佳は、お願い、とタオルを渡して背を向ける。男は丁寧に千佳の背中を拭く。背中から腰、お尻。もう愛撫はしない。拭き終わると千佳の背中を軽く押し、バスルームから二人は出た。男はすぐにボクサーブリーフを穿く。靴下とアンダーシャツを身に付けてから、男は冷蔵庫を覗く。高いな、そう言いながらアクエリアスのペットボトルを取り出してごくごくと飲んでいく。その間に千佳は下着を身につけ服を身に纏う。カーディガンだけそのままで、テーブルの腕時計を手に取り、付ける。文字盤をちらりと見たが、時間は何時なのかわからなかった。秒針が動いていることだけ確認して男のほうへ視線をやる。気付いた男が左手に飲みかけのペットボトルを持って千佳のそばへ。
「飲む？」
　千佳が、ん、と曖昧に返事をすると男は口にアクエリアスを含み、千佳に口付けて流し込む。少し口の端から零れる、つ、と滴る。甘酸っぱい、と千佳は感じる。千佳がごくんと飲み込むと、男は一度唇を離し、ペットボトルをテーブルに置いて千佳の唇を吸う。
「時々さ、出張でこっち来るんだけど、また会えない？」
　千佳は無言で首を横に振る。ショートボブがぱさりと動く。
「そっか。残念」
　そう言って男はまた千佳にキスをする。優しいキスで千佳の胸はいっぱいに満たされる。隅々まで生血が巡るイメージが身体に重なる。男のキスに千佳も唇で応戦する。噛み付き、しゃぶり、吸い、舌を絡める。男が唇へのキスをやめる。千佳の頬に軽く口付けする。
「俺ね、キスが気持ちいいのが一番好き。チカちゃんとのキス、気持ちいい」
　千佳をぎゅうっと強く抱きしめる。千佳はふふっと笑い聞き返す。
「エッチは？」
「そりゃ」
　男は真顔。
「できるに越したことはないけど」
　頬と頬をそっとこすり合わせて、男は服を着るために千佳から離れる。スラックスを穿き、カッターシャツを羽織ってボタンを留め、スラックスのジッパーをあげてベルトを締める。その様子を千佳はソファに座ったままずっと見ていた。きれいな動きをする生き物だと思いながら。ジ

ャケットまで身につけると、仕事ができそうな――パリッとアイロンをかけたような――ビジネスマンが一人できあがった。
「ネクタイはしないの？　クールビズ？」
　千佳が訊く。
「いや、もう仕事終わったから外してるんだ。泊まってるホテルに置いてきたよ。ほら、手ぶらだし、時計もしてない」
　そういえば男は手ぶらだったな、と千佳はなんとか思い出す。
「じゃあ、そろそろ出ようか。楽しかったよ、ありがとう」
　男はフロントに内線をかける。
「チェックアウトを……はい……ええと、ペットボトルを一本……はい」
　カチャリと受話器を置き、エアシューター前で財布を取り出す。
「ホテル代は半分ずつでいいかな」
　男が突然に言うので千佳は慌てて財布を取り出そうとして。けれど男が笑う。
「冗談だよ。ホント、また一緒にしたいなあ」
　笑いながら慣れた風で料金をカプセルに入れる。シューターの小さな扉を閉めてボタンを押すと、シュゴーと空気の音がしてカプセルが送られたようだ。千佳はカーディガンとトートバッグを手に持ち、もういつでも出ることができる。
「もう一回キスさせて」
　男が言うので二人は軽く唇を重ねる。
「ケータイ番号とか、ダメ？」
　千佳は首を横に振る。
「そっか、残念。また会ったらそのときはいいよね？」
「そんな気分だったらね」
千佳はにっこり笑って返す。千佳のほうから男の頬にキスをする。二人は部屋を出る。身体が触れないようにわずかな距離を保ちながら。再びシュゴーと空気が鳴り、ガコンとカプセルが戻ってきた音が大きく響く。部屋には誰も居ない。

　ホテルを出ると二人は他人行儀な距離を取りながら表通りのほうへ向かう。ホテルからのこの通りは夜に車が通ることがまれなので、二人は距離を開けて並んで歩く。正面から通行人が来ると、二人はもっと距離を取って、間を通らせる。もう、触らない。ホテルを出たら他人。けれど切り離すことはできなくて。時々様子を伺うように、互いに顔をちらちらと見る。視線が絡むことは、ない。男が声をかけてきたコンビニの明かりが見える。二人は無言で歩き続け、コンビニ前で向かい合う。
「タクシー代、出してあげようか？」
　男が訊く。千佳は首を横に。
「まだ電車があるから、それで帰れるよ。ありがと」
　男は少し残念そうに、そう、と微笑んだ。ちょうどコンビニ前にタクシーが待機していたので、男はそれに向かう。乗り込もうとして振り向いて笑う。
「今夜はありがとう。またね」
　そのまま乗り込み、ドアが閉まる。バタン。中で男と運転手が、行き先だろう、ほんの少し話してタクシーは発車する。道は少し混んでいるが、信号が変わると車の列は滑らかに流れ、男の乗ったタクシーもその中に紛れる。やがて見えなくなった。
千佳はずっとタクシーを目で追っていた。見えなくなってからトートバッグからミネラルウォーターを取り出す。一口だけ飲んでまたバッグに仕舞う。腕時計を確認する。零時前。急げば男に言ったとおり終電に間に合うだろう。けれど気分が良かった。もう少し酔いたかった。
　男が言った「またね」を頭の中で反芻する。「またね」、良い言葉だ。また、はないだろう。ほぼ間違いなく。でも、もしも会えたら、微かな期待が暖かい。良い言葉だ。「またね」「またね」「またね」。千佳の胸に心地良く響く。感じの良い男だった。純粋に「いい男」でもあったのだろう。本当はまた会ってもよかったのかもしれない。毎週だって会っても良いのかもしれない。けれど。千佳の意識がブレーキをかける。煮込みすぎた出汁はアクが強くなっちゃうのよ。上澄みだけ、おいしい所だけ食べたいじゃない。会わないほうが良いはず。互いに気持ちよく別れたら、それがベスト。会わないの。「また」は、機会があったそのときに考えれば良いのよ。
千佳は意識して深く息を吸い込む。ゆっくりと吐き出す。もうちょっと飲もう、そう思った。そして思いつく。ここからだとマジックバーが近い。一人でいくのは初めてだけれど、そこのお酒はなかなかおいしいので良いかもしれない、と思う。マジシャンがついてくれるから寂しくもないだろう。入れなかったらその時にどこか別の店を探せば良い。カーディガンを羽織る。
　千佳は歩き出す。マジックバー『アルデバラン』へ向かって。

　マジックバー『アルデバラン』は繁華街の本当に外れにある。細い路地を入った雑居ビルの四階。知っていないとたどり着くことはまずできない。千佳は間違えることなく、コンビニから三つ先の角を曲がる。ゆっくりと、けれどしゃんとして歩く。せかせかと歩くのはなんだか今の気分に合わないような気がして。歩幅を広く、ゆったりと。歩みを進め、雑居ビルのエレベーターに乗り込む。ちょうど一階に止まっていたのだ。階数ボタンを押し、エレベーターのドアが閉まる。相当に古いのだろう、ぐらりと揺れながらエレベーターは上がっていく。目的の四階に着くと、ガコンと音がして止まり、ドアが開く。目の前に『アルデバラン』の透明なドアがある。右手でドアを押して入る。店内のあちらこちらから「いらっしゃいませ」と落ち着いた声が重なって聞こえる。店内を見回すと、思っていたよりずっと空いていた。千佳は店内に足を踏み入れ、ゆっくりと歩く。若いマジシャン――バーテンダーかもしれない――がカウンターの中から手を差し出したので、その席に座った。空いていたのでトートバッグは隣の椅子に置く。近くで見ると、見たことのある顔のようだった。前に来たときについてもらったのかもしれない、と考える。無理に思い出そうとはしない。熱いおしぼりを手渡され、手を拭いている間に紙製のコースターが置かれる。

「お飲み物は？」

「ウオッカアイスバーグを」

　千佳は今日初めて強めのお酒を注文する。ウオッカにペルノを垂らしたお酒だ。あ、と千佳は続けて言う。

「チェイサーにペシェウーロン、お願いできます？」

　目の前の男は、かしこまりました、と言って奥に消えた。おそらく厨房にいったのだろう。取り残された千佳は少し、ほんの少しだが心細くなった。店内は薄暗い。何本もの小さなスポットライトがカウンターテーブルを照らす。バックでは古い歌謡曲がかかっている。小さな音ではなく、ちゃんと耳に届く大きさで。知っている歌だったので千佳は小さく口ずさむ。曲名や歌手までは思い出せない。口ずさむと心細さがすこし改善されたように感じた。知っている歌。それが流れる店内。居心地は、思っていたほど悪くない。千佳の他、店内には二組のカップルがいた。一人なのは千佳だけだが、悪くないと思った。

　隆行は千佳が一人で来ていることに少しばかり驚いた。彼女がここに来るときはいつも男連れで、しかもわりと酔っぱらっていたように見えていたからだ。酔っぱらった状態でここに辿り着くにはよっぽど土地勘があるか、もしくはそういう人につれてきてもらわなければならないと隆行は思っている。隆行自身が方向音痴で、この店に勤めだした頃は何度も違うビルに入ったり、そもそもビルのない小道に出たりしていた。そういうときは心の中で、なんでオーナーはこんなわかりにくい場所に店開けたんだ、と愚痴っていた。もうこの店も長いので自身が迷うことはないが、電話で場所の説明をするときはいつもいつも言うことがメチャクチャになってしまう。たまに店にかかってきた電話を取ることもあるけれど、場所を訊くような内容だとすぐに別の店員に変わってもらう。隆行は少し、電話が苦手だ。声だけのコミュニケーションに自信がない。プライベートでも電話はほとんどしないし、したとしても用件だけしか喋らないのでせいぜい二、三分といったところだ。

　そういうわけで、今は酔っているように見えないとはいえ、千佳が一人で『アルデバラン』を訪れたことをすごいなあ、と思った。単純な尊敬だ。きっと頭の作りが違うのだろうと思った。思いながらバーテンダーのケンにウオッカアイスバーグとペシェウーロンを依頼する。千佳の前に戻り、一枚のトランプを取り出す。

「はじめまして、じゃないですよね。でも一応、ご挨拶ということで」

　トランプからポッと炎が上がり、名刺が現れる。そのまま千佳に差し出す。

「たっくです。今夜はよろしくおねがいします」

　キラキラとした笑顔で言う。隆行は、自分がこういう顔をすると女性が喜ぶことを知っている。せっかく安くないお金を払って遊びに来ているんだからできるだけ楽しんで貰いたい、と隆行は常々思っている。だから、千佳が困ったような顔をしたことで慌ててしまった。けれど千佳の困り顔の原因はすぐにわかる。

「はじめましてじゃないんだっけ？　うーんごめんなさい、思い出せない」

　千佳が困ったように笑う。名刺を受け取りまじまじと見る。名刺には店のロゴと住所、電話番号、それとひらがなで『たっく』と店での名前が書いてあるだけだ。名刺はオーナーがまとめて発注する。まじまじと見るような内容ではないし、そんなに長いこと読まれたこともないので、隆行は気恥ずかしさを覚える。

「たっくさん。たっくんって感じだよね。お若いし」

「ははは。よく言われます。たっくんでいいですよ」

　千佳が名刺を眺めているとケンがドリンクを運んできて、あれ、と小さな声を上げる。

「いらっしゃいませ。お一人でしたか。てっきりお二人なのかと思ってチェイサー付けたんですけど、ペシェウーロンがチェイサーで良かったですかね？」

　隆行はしまった、と心の中でつぶやく。チェイサーだとそう言っていたな、そう思い出す。隆行はあまりお酒に詳しくないが、この店で働くようになって少しは注文のパターンを覚えてきていた。つもりだった。まだ時々、こういった小さなミスをする。

「ごめんありがとう」
　隆行がケンに向かって言う。
「じゃあお水も貰っておこうかな」
　千佳は笑顔でいる。ケンが三つのグラスを千佳の右手側に置き、去る。隆行は千佳に、すみません、と小さく言う。千佳はまったく気にしていない。ゆっくりと首を横に振る。ようやく名刺をカウンターテーブルに置き、千佳はロックグラスを手に取る。薄く黄色に濁ったお酒を舐める。目を閉じて唇をグラスに付け、そっと僅かな量を流し込む。口の中が、喉が、カッと熱くなる。おいしい、と千佳は思う。おいしくて、既に楽しい。千佳は嬉しくなる。隆行を期待の目でじっと見る。
　千佳の視線に気付いた隆行はおもむろに手からバラバラとトランプを出現させた。出してはテーブルに置き、出してはテーブルに置き。一箱分五四枚。千佳はキラキラと目を輝かせている。その視線が隆行には気持ちが良い。
「ねね、今から何が起こるの？」
　千佳が催促する。
「そうですねぇ……あ、お名前伺っていいですか？」
「チカよ」
「じゃあ、チカさん、好きなカード言ってください。僕、それを一瞬で見つけますから」
　名前を交わすというのは距離を一気に縮めるテクニックだ。名前を知らないままだとただの他人だが、名前で呼ぶだけで親密度がぐっと上がる。千佳のウキウキが目に取れた。
「じゃあね、ダイヤのクイーン」
　裏向きに散らばったトランプをしばらく見てから千佳は隆行に告げる。はい、と隆行は答えてから一枚を千佳に表が見えるように取り上げる。クラブのジャック。
「違うわよ？」
　千佳が怪訝そうな顔をしたのも一瞬、隆行が手に持ったトランプをささっと横に振るとダイヤのクイーンに変わる。千佳がわぁ、と声を上げる。
「ダイヤのクイーンですよね？」
　言いながら隆行は自分の手のトランプを覗き込む。ダイヤのクイーンだ。うんうん、と千佳は力強く頷く。ロックグラスを置き、茶色のドリンクを一口飲む。仄かに桃の香りが広がる。ペシェが多めに入れられていて、濃い。優しくておいしい。ウオッカアイスバーグで焼けた口にふうわりと馴染んでゆく。少しずつ、意識と身体がまた乖離を始める。始めるが、意識の千佳は身体の場所から動かない。千佳が意識と身体の二重構造になる。意識の千佳がロックグラスを掴もうとし、身体が二テンポ遅れてグラスを掴む。意識はすっと口に運ぶが、実際の身体はゆっくりと口を付ける。まるで残像のように。カラリンと氷が音を立て、千佳の身体がびっくりする。耳がピクリと反応した気がした。意識の千佳は椅子に座ったまま微動だにせず隆行の手をじっと見つめる。

　隆行に促されるままに千佳の手はトランプを選んだり、ひっくり返したり、指差したりした。隆行は鮮やかな手さばきでトランプを操り、千佳の喜びの声を得た。千佳は合間合間にロックグラスを傾けて、常にアルコールで口を湿らせていた。コリンズグラスのペシェウーロンははじめに少し飲んだだけで、チェイサーの水にはまったく口を付けていない。
　居場所こそ重なっているが、千佳の意識と身体はもう別のものだった。トランプを選び、声を上げるのは身体の千佳だ。意識の千佳はただただ無言で隆行の手を見つめる。時々身体にアルコールを求めながら。身体は忙しい。目の前のマジックにふわふわした気持ちになっていて、子供のように楽しんでいるが、意識の千佳のためにお酒を口に運ぶ。面倒くさいのでロックグラスばかり手に取っていた。だから千佳は酔いがまわって、ずいぶんと早く身体と意識が別々になってしまった。意識の千佳は隆行の手から視線を逸らさないまま、身体ってなんて頭が悪いんだろう、と少し苛立ちながら考える。身体はガキだ。身体は動物だ。目の前のことだけに集中して、なんと愚かしいのか。
　右手がロックグラスを取り、口に付けて傾けたが、雫がほんの僅かに流れ込んできただけだった。飲み干してしまった。隆行が気付く。
「チカさん、ドリンクお出ししましょうか？」
　意識の千佳が無理やり身体にくっついて言葉を放つ。
「いいの、まだこっちが残ってるから」
　そう言ってコリンズグラスを手に取る。グラスの表面は中身の冷たさで水滴がたくさん付いていた。気にせず口に運び、少しだけ飲む。融けた氷で少し薄くなっている。
「これがなくなったら何か頼むわ」
　千佳はウインクする。
「それにしても」
　隆行はトランプを触りながら千佳の言葉に耳を澄ませる。
「きれいな手よね」
　ははは、と隆行は笑う。マジックは一時中断することにした。
「手じゃなくて手品見てくださいよ」
「だってきれいなんだもの」
　意識と身体のシンクロができた。意識の千佳は喋る口を手に入れる。呂律が少し怪しいのはバラバラな意識と身体を寄せ集めたことによるギャップか、酔いの効果か。まだ隆行の手を眺めている。
「チカさんだって可愛らしい顔してるじゃないですか」
「可愛らしい、か。時々言われるけどね。可愛いとか言われて喜ぶ歳でもないし。まあ若く見られるのはいいんだけどさ」
　少し拗ねた風な口をきいてみる。求めているのは隆行の慌てるさま、あるいは、甘いフォロー。口に運んだペシェウーロンがフルーツティーの甘さで、千佳の気持ちはほどける。拗ねてるわ

けじゃないのよ。拗ねたフリをしてるだけなのよ。構って欲しいの。たまには甘えたいの。そんな台詞が頭を巡り、けれど、口には、出さない。
「たっくんだってかわいい顔してるじゃない。まだ若いんでしょ？」
　口に出さない台詞の代わりに隆行について言及する。隆行は困ったように笑う。
「ネイルサロンいってますね。月一くらいで」
　千佳はへぇ、と興味を持つ。
「チカさんみたいにじっと手ばっかり見る人ばかりじゃないんですけど、やっぱり手は商売道具ですからね。きれいに見せたいですよ」
　千佳はコリンズグラスの中身も空にした。
「ラスティネイル、お願いできる？」
　かしこまりました、と隆行は厨房に消え、ケンにオーダーを伝えてから千佳の前に戻ってくる。隆行が居ない間、千佳は店内を見渡していた。二組いたカップルのうち一組は既に帰ったようだ。戻ってきた隆行に訊く。
「週末なのにあんまり混んでないのね。あっさり座れるとは思わなかったのよ」
「ああ、それは」
　隆行は答える。
「うちは早い時間のほうが人多いんですよ。暗いと店に辿り着くのが難しいんじゃないかな」
　隆行が笑い、千佳も笑う。
「まあ、それは冗談ですけどね。土日は夕方から開けてますけど、そっちのほうが人は多いかもしれないですね」
　ふうん、と千佳は納得し続けて訊く。
「クローズは何時？」
「二時です。土日は零時。で、月曜日が定休」
「今夜はお店終わったらどうするの？」
「どうしようかな、特に予定は。帰って寝るんじゃないですか。明日は夕方からだし」
「そっか」
　千佳は満足して喋り終える。隆行は店員とお客という線引きをきっちりおこなっている。ここから先は触らせてもらえない。変な期待を持たせない隆行の言葉に、安堵する。二時のクローズまでここにいて、それから帰ろう。千佳はしっかりと胸に決める。そして、帰るまではこの空気を楽しもう。そう思った。ケンがラスティネイルを運んできて、空になったグラスを下げる。琥珀色のお酒が入ったロックグラスをコロコロと鳴らしてから、千佳は中身に口を付ける。強く甘い。甘くて幸せだ。
　千佳がぼんやりしているように見えたので、隆行は次のマジックを始めようと思った。
「僕ですね、占いみたいなこともできるんですよ」
　裏返したトランプをさっとテーブルに広げる。千佳の視線が隆行の手の動きを追う。
「一枚選んでください。それから運勢、読んじゃいますから」
　隆行がにっこり笑うと千佳も笑顔で返す。千佳は手を迷わせながら一枚を選び、上に右手を乗せる。意識がピンと選んだ。身体が意識の言うとおりに従った。

「これ」
　隆行は、はい、と言いながら他のトランプを片付けてしまう。残された一枚のトランプ。
「ひっくり返してください」
　言われるがままに千佳がトランプをめくる。ハートの三。
「ハートは愛情、三っていうのは複雑な関係」
　隆行は身を乗り出して、そして小声で言う。厳かに。
「チカさんが求めているのは、シンプルな愛情。つまり『愛されたい』。寂しいんですかね？」
　隆行は身体を元の位置に戻し、両手をテーブルに置いて言う。
「ただし、これはただの占いじゃなくて、マジックです。裏向きにして手を乗せてください。僕は触りません」
　千佳が言われたとおりにトランプを裏返し、上に手を置く。隆行がゆっくりカウントする。「スリー、ツー、ワン」言ったとおり、隆行の手は何もしない。
「ひっくり返してください。チカさんの求めるものが現れます」
　千佳がトランプをひっくり返すと、見たことのない図柄のトランプに変わっていた。トランプだろうか、端にＰと書いてあり、中央にはバラの花束を抱えた女性が描かれている。
「チカさんはお姫様扱いされたいんですよ」
　なるほど、Ｐはプリンセスということらしい。気付いた千佳はくすくすと笑い出す。
「なるほどねぇ」
　まだ笑う。
「要するに、どれを選んでも『愛されたい』になって、お姫様トランプ、ってわけね」
「いやいや」
　隆行が否定する。
「ちょっと違いますね、どれを選んでもじゃなくて、チカさんは僕にハートの三を選ばされたんですよ」
　自慢げに。
「へぇ。もしかしてさっきたっくんが並べたの全部、ハートの三だったの？」
「さあ。でも、そんな簡単なことはしませんよ」
　隆行も笑う。でもタネは秘密らしい。それ以上は言わない。
「プリンセスのトランプは記念にどうぞ」
「ふふ、ありがとう」
　千佳が手元のプリンセストランプを眺める。ゆるく長い髪、確かに頭にはクラウンを被っていて、手には溢れんばかりのバラ。黒い線とオレンジ、ピンクの彩色でポップに描かれている。
「ただ、これはですね」
　隆行の声に、千佳の視線が隆行の口元に移動する。
「女性一人客以外にはちょっと出しづらいかな、と思ってて」
　隆行は使ったトランプを手でトントンと揃える。
「やっぱり女性一人客ってめずらしいの？」

　千佳が尋ねる。
「そうですね、多くはないです」
　隆行はにっこり笑って軽い嘘をつく。正しくはほとんど来ない。そもそも一人客自体があまり来ない。男性の一人客ならたまに来るが、彼らはマジックではなくお酒を楽しみに来る。
「トランプ以外はやらないの？」
「僕はカーディシャンですから」
「カーディシャン？」
　隆行は説明する。つまりカードマジックを専門に扱うマジシャンのことをカーディシャンと呼ぶのだ。
「じゃあ、トランプ以外はしないの？」
「してもいいですけど、あんまり巧くないんですよね」
　隆行はぼんやりと向かいの壁を見る。なんとなく。何かを思い出そうとしたのだが、何を思い出さなければならないのかを思いつかなかった。手でトランプを切っていてふと思い出す。コインマジックなら少しできるか、と。
「コインマジックならできますよ。失敗するかもしれないけど」
　隆行がイタズラっぽく笑ったので、千佳も自然と笑った。意識の千佳はトランプのマジックをもっと見たいと思う。意識が無理やり身体の口を動かす。
「ううん、トランプのマジック、もっと見たい」
　それは多分に甘えたような声だった。意識の千佳がびっくりする。そんな甘えた声、出すつもりじゃなかったのに！
　隆行は、千佳が随分と甘えた声を出したので気分が乗ってきた。トランプマジックをもっと見たいと言ってもらえたのも嬉しかった。きっと千佳がちょっとしたマジックにも喜びの声をくれるのだろうと期待して。もしかしたらマジックじゃなくて、手でトランプを一度にひっくり返したりとか、そういうカードを扱う基礎的なテクニックを見せただけでも喜ぶのかもしれない、とさえ思った。けれど、マジシャンとしての小さな小さなプライドで、きちんとしたマジックを見せようと思った。目の前の女性に喜んで欲しかった。目の前に観客がいてこそ演者は輝くのだ。一箱のトランプを取り出し、千佳の目の前で開け、中身を出す。
「チカさんの好きなだけ切ってください」
　千佳は言われるままにトランプの山を取り、ぎこちない手つきで切る。酔いが回っていることにしておこう、と思いながらたどたどしく、けれど真剣にトランプを切ってまとめて、最初に置かれた場所におく。
「今、チカさんが切ってくれたのでこのトランプの順番はバラバラです。よね？」
　千佳は頷く。期待する瞳。隆行には心地良い。さっとトランプを広げ、端のトランプをひっくり返すことでざらっと全てのトランプが表を向く。予想通り、千佳が喜ぶ。
「すごーい」
「この通り、バラバラですね。じゃあ、コレを元に戻して」
　言いながら反対の端のトランプを返して、全てのトランプが裏返る。また千佳は、わぁ、と声をあげる。にこにこしながら隆行はトランプをまとめ、ざっくりと四つの山に分ける。

「僕がコレをはじくと、一番上がエースになります。いきますよ」
　中指でパチンと四つの山をはじいていく。隆行がどうぞ、とでも示すかのように手を差し出したので、千佳は山の一番上をめくっていく。クラブのエース。ハートのエース。スペードのエース。ダイヤのエース。
「すごぉい」
　言いながらラスティネイルに口を付ける。とろりと口に流れ込んでくる甘い香り。意識はトランプに向けられている。
「マジックってさあ」
　唐突に千佳が口を開く。甘えた声。千佳自身には不本意な口調だったが。隆行は聞き入る。
「わけわかんなくて、楽しい」
　言ってから千佳はふふふと笑い出す。全身がぽかぽかして、身体全てで笑っているみたいだ。そう意識が感じる。
「ははは、わけわかんないですか」
　隆行も笑う。
「うん。時々思うんだけどさ」
　千佳の言葉に隆行は耳をそばだてる。
「マジシャンって本当は超能力者で、わけわかんないこといくらでもできるんだけど、一般社会に紛れ込むためにマジシャンなんて仕事をしてるのかなって」
　隆行が吹き出す。
「ちょっとぉ。ちょっと思ったこと言っただけじゃない。もぉ」
「ははは、すみません。面白かったんでつい」
　まだ笑いながら隆行が言う。
「そんなマジシャンが居ないとは言い切れませんけど、と前置きして。少なくとも僕のマジックはどれも、ちゃんとタネはありますし。まあ、多少は手が器用かもしれませんけど」
「そうよねぇ」
　千佳の身体は柔らかく笑い続けている。意識の千佳がピンと考えを張り巡らし始める。隆行と身体の笑い声が少し遠くなる。
　千佳は時々考えるのだ。自身が普通の人とは違う種類の生き物なんじゃないかって。男を食べないと生きていけない化け物なんじゃないかって。だから毎週こんなことを繰り返してしまう。そうでもしないと飢えて狂いそうだから。
　もし。
　もし普通じゃない、たとえば超能力を隠して生きている人と出会えたら、何かを分かち合えるかもしれない、と思う。普通の人と話すときの間にあるバリアだか溝だか、そういうものについて打開策を文殊の知恵できるかもしれない。そんなことを考える。そしてそれは起り得ない。
　マジックは楽しい。はっきりとだまされるところが良い。だましだまされるのが他人だから良い。幕が下りたらはいおしまい、っていうところが良い。知り合い同士の人と人とではこうはいかない。つながりがずっと続くのは、少なくとも千佳には苦痛だ。千佳に友達はほとんど居な

いし、恋人ももちろん居ない。男と付き合うことは、もうできない。そう千佳は思っている。何度か付き合った相手が居ないわけではない。けれど、彼氏となった男が束縛してくると、もういやになって、千佳の側から別れを切り出す。一番続いた相手とでもせいぜい一年強だ。独り身で、週末にふらりと街に出て身体だけの関係を持ったほうが楽だ。ずっとずっと楽だ。他の女性と話していると、千佳は自身を異端だと感じる。みんな二人だけの束縛関係を楽しんでいるのだ。たとえ、話す内容が愚痴ばかりだとしても。束縛関係を楽しめる人をうらやましく思う。そしてそういう人とはわかり合えないだろうな、と漠然と感じる孤独。意識ではなく身体が求めるのだ。人との関わりを。身体ではなく意識が拒否するのだ。人とのつながりを。千佳は飢えた孤独な生き物だ。人はみな孤独だと昔の人が言う。千佳自身はそれを信じない。周りにいる人たちは、少なくとも表面上孤独ではない。孤独でない人がうらやましくて、胸が苦しくなる。その痛みもアルコールが慰めてくれる。アルコールと、嘘ばかりの会話が。週末、飲みに出ずにいられないのは一週間の寂しさを癒すためだ。一晩だけの関係、家に帰ったら全部が、夢。

「チカさん？」
　ぼんやりと遠くを見る千佳に隆行が話しかける。話しかけて良いものか少し悩みながらだったので声は小さい。はっとした千佳は中途半端な笑顔で隆行の顔を見る。
「何かあったんですか？」
「どうして？」
「いや、いつも来るときは男性と一緒じゃないですか。それに今日はなんだかぼんやりしてるから」
　ふふふ、と千佳は笑う。
「ああそうか、ここには何度も来てるものねえ。顔も覚えられちゃうか。このお店気に入ってるのよ」
　隆行は言って良いものか悩んだ。が、口に出してしまう。
「毎回違う男性連れてらっしゃいますよね」
「うん、ナンパされてね。私意外とモテるのよ」
　少し嘘。自分から引っ掛けることのほうがむしろ多いだろう。少なくともここに一緒に来るような男は。ここでマジックを見ながら飲んで、そのままホテルに向かうのが常だ。そんな夜は視界が嘘ばかりでキラキラ彩られている気がする。そしてそれは千佳にはかりそめながら幸せの欠片。欠片を集めて幸せにおぼれたい、時々思う。日常が不幸なわけではない。恵まれているほうだろう。そこそこの収入もある。仕事がつらいわけでもない。ただ平坦なのだ。平坦でつまらなくて、渇えているのだ。右手でロックグラスを取りラスティネイルを流し込む。甘い液体で口が湿る。残り少ない、次は何を飲もう。カラカラとグラスを鳴らす。口に運ぶ。最後の一滴までが流れ込む。
「フレッシュのミントってある？」
　千佳が訊く。あればミントジュレップを飲もうと思った。
「ごめんなさい、フレッシュは切らしてしまって」
「そっか」
　何を飲もうか、涼やかなものが欲しい。悩んでから注文する。
「モスコミュールおねがい」
「かしこまりました」
　隆行は頭を下げ、厨房のケンへオーダーを伝える。千佳の前に戻りながら壁の時計を確認した。そろそろラストにもう一つマジックをするかどうか決めないといけない時間だ。
　千佳は水滴がたくさん付いたチェイサーの水を飲んでいた。ぼんやりと。戻ってきた隆行に笑顔を見せる。待っていた、そう言わんばかりの華やかな笑顔。隆行は背筋がぴんと張る。終わりよければ、というじゃないか。最後の瞬間に気を抜いてはいけない。一番自信のあるマジックを披露しようと思った。ケンが銅でできたカップをもってくる。
「おまたせしました。カボスコミュールです」

「カボスコミュール？」
　千佳が笑う。
「いいカボスが手に入ったもので。勝手に変えちゃいましたけど、美味しさは僕が保証します」
　ケンが笑顔を見せる。千佳も笑顔で返す。
「そっかぁ、カボスも旬だものね。ありがとう、頂くわ」
　置かれたカップをすぐに手に取り、一口飲む。
「おいしい」
　ケンが会釈して厨房へ戻り、千佳の視線が隆行に向けられる。
ピシッと張り詰めた空気。
「そろそろ最後のマジックでいいですか？」
「あら、もうそんな時間か。ええ、お願い」
　隆行がトランプの箱を取り出す。中身を出す。シャッフル。表向きにざらっと広げる。
「一枚、選んでください」
　右手にモスコミュールを持った千佳は左手で一枚選んだ。ハートのキング。隆行がマジックペンを取り出す。
「好きな文字、書いちゃってください。絵とかでもいいですよ」
　キャップを外して千佳に手渡す。モスコミュールをコースターに置き、千佳はペンを受け取る。少し悩んで、カタカナで「チカ」、それと四葉のクローバーをトランプの中央に描いた。ドキドキしながら。ペンを隆行に返す。隆行は受け取りキャップをしてペンを片付ける。広がったトランプをさっき千佳に見せたように端からバラリと全て裏返す。
「好きなところに入れてください。あ、そのままの向きで」
　言われるままに千佳がトランプを中央より右寄りのところに差し込む。隆行がまたザラリと全てのトランプを返し、もう一度ザラリとやる。
「ここにありますね」
　そう言って隆行はトランプをまとめ、箱の中に入れてしまう。灰皿を取り出し、トランプを入れた箱を置く。マッチで火をつける。めらめらゆらゆらと炎が上がる。
「ねね、燃やしちゃっていいの？」
　千佳が心配そうに、けれどモスコミュールを舐めながら言う。
「ふふふ、燃やしちゃいます」
　隆行はにこにこと炎を見る。ただトランプが燃えているだけとは思えないほどめらめらと良く燃える。もちろん良く燃えるように仕込んである。普段はこの間に客と会話を交わすのだが、千佳のことはそっとしておいたほうがいいと思った。なぜかはわからないけれど。何もかもが隆行の狙い通りに進んでいる。正しい糸を手繰り寄せている実感とでも言おうか、隆行は充実感を得る。やがて灰皿の上には灰だけが残った。
「ねぇ？　なくなっちゃったよ？」
　千佳が身を乗り出して訊いてくる。手にはモスコミュール。
「チカさん」
　隆行が千佳をまっすぐに見て声に出す。

「コースター、裏返してみてください」
　千佳は左手でコースターを裏返すと、小さく「あっ」と驚きの声を上げる。コースターの裏にはさっき千佳が描いた文字と絵が浮かんでいた。コースターも今まで気付かなかっただけだろうか、ハートのキングがあしらってある。
「すごぉい……」
　千佳が絶句する。得意なマジックが綺麗に決まり、観客である千佳が驚き、隆行は最高に気持ちが良かった。これがあるからマジシャンはやめられない。そう思う瞬間。絶句していた千佳がふふふと笑い出す。
「楽しかった。ありがとう。じゃあ、清算お願い」
　隆行はにっこり笑って、かしこまりました、と伝票をチェックする。その間に千佳はカップの中身を飲み干す。旬のカボスは香りも良く酸っぱい。炭酸も相まって、望んだとおりの涼やかな後味だった。
「こちらになります」
　隆行が金額を書いた小さな紙をトレイに乗せて見せる。千佳はそれを確認し、財布から一万円札をトレイに乗せる。受け取った隆行がおつりをまたトレイに乗せ、カウンターテーブルに置いた。
「チカさん、今度はうちの料理も食べていってくださいよ。僕が言うのもなんですけど、旨いですから」
　そういう隆行に、千佳は札を財布にしまいこみながら笑いかける。
「ふふ、ありがと。でもねぇ、私、レストラン経営手伝ってるからそういうこというとハードルあがっちゃうよ？」
　くすくす笑いながら。
「良かったらお店に来てちょうだいよ」
そう言いながらトートバッグの中を探す。レストランのパンフレットがあったはずだと思っていたが、どうやら今日は持っていない。
「パンフレット持ってるはずだったんだけどな。無いか、まあいいや。『ひなたの庭』っていう自然食レストランなんだけどね。女の子には人気なのよ」
「あ、そこ聞いたことがあります。ベーカリーショップもやってますよね。僕、あそこのタマゴサンド好きなんですよ」
　隆行の言葉を聴いて千佳は営業用の笑顔になる。ほとんど無意識に。
「あら、ありがとう。商品開発も手伝ってるわ。タマゴサンドはね、確かに自信作」
　言いながら千佳は、隆行もどうせ口ばかりなのだろうと考える。自身もそうだ。こういう場合の言葉は往々にして社交辞令である。実際タマゴサンドは人気があるけれど、隆行が自分で買いに来てくれたとは思わなかった。そして事実、隆行は客からの差し入れで食べたことがあるだけだった。一度食べたことがあるだけで店名を覚えてもらえるというのはそれだけで充分価値の有ることかもしれない。だが、千佳はそれだけで満足しない。自ら進んで店に足を運んでもらいたい、何度も運んでもらいたい。千佳は常々思っている。健やかなものを食べて欲しいのだ。多

くの人に。健やかであることは正しいことだ、往々にして正しいことは善だ。そう千佳は思う。目にする全ての人が健やかであれば良いと思う。そんなこと、口に出して言うことはない。千佳自身、それがエゴだとわかっているから。千佳だけの信念だと知っているから。
「じゃあ、おやすみなさい」
　そう言って千佳は透明なドアへ向かう。
「おやすみなさい、お気を付けて」
　隆行はきれいなお辞儀をして千佳へ呼びかける。千佳は振り向かず、ドアを開け外に出る。おいしいお酒と楽しいマジックで気持ちが高揚していた。足はしっかりとしている。
　千佳が出ていったドアが閉まり、隆行が千佳の居た席を片付けはじめる。文字が浮かんだコースターはそのままに置いてあった。名刺とプリンセスのトランプは、ない。モスコミュールが全て飲み干されたカップは、中で氷が解け始めていた。手にすると冷たく、カラリと小さな音がする。

15

　千佳が『アルデバラン』を出ると、エレベーターは一階に止まっていた。下へのボタンを押し、待つ。ゴウンと音がしてエレベーターは目を覚ましたようだ。ドアが開く。千佳は乗り込み一階のボタンを押す。それはゆっくりとした動きだった。その証拠に、閉じるボタンを押そうとしたところでドアのほうが先に閉まる。来たときと同じで、揺れながら今度は下る。ガコンと大きく揺れてからドアが開く。一階。夜が終わるまであと少し。

　千佳はビルを出て大通りに向かおうとした。人通りはまばら。後ろからのろのろ運転のタクシーが来たので道の左に避けてタクシーを見ると、運転手と目が合う。タクシーは停まり、ドアが開けられる。千佳は乗り込む。
「ありがとうございます」
「大通りまでいくと流れませんからね」
　運転手は言い、どこまでいくのかと尋ねてくる。千佳は行き先に自宅の住所を告げ、シートベルトを締める。トートバッグからミネラルウォーターを取り出してごくごくと飲む。深く、息が漏れる。幸福なため息。ぼうっと前方を見遣る。運転手は混んでいる道を避けているようで、タクシーはどんどん進む。代わりによく曲がるので、千佳の身体は左右にグラングランと揺れた。無口な運転手だった。
ときどきやたらとお喋りな運転手のタクシーに乗ってしまう。その時、千佳は、はずれに乗った、と思う。お喋りなタクシー運転手は、基本的に自分のことしか話さない。あるいは、やたらとおせっかい。そしてその話はどの運転手でも似たり寄ったりだ。正直もう飽き飽きしている。夜のタクシーに乗るときはいつも、もう楽しいことは終わってしまっている。楽しいまま帰れるかどうかはタクシー運転手の対応に左右されるといっても過言ではないかもしれない。だから、このタクシーに乗れたのは千佳にとって当たりだった。
　三〇分ほどタクシーに揺られると自宅マンションの前に着いた。渋滞に巻き込まれなかったせいか、普段乗って帰るより料金はかなり安かった。千佳は料金をお札で渡し、おつりはいらない、と伝えた。
「おやすみなさい」
　千佳がタクシーを降りる瞬間に運転手が声をかけた。振り向くとドアは閉まり、タクシーは発車していた。感じの良い運転手だった。良い夜だったと千佳は心から思った。
　マンションに入り、エレベーターの上ボタンを押す。エレベーターは四階に止まっていたようで、ゆっくりと降りてきて、ドアが開く。乗り込む。最上階のボタンを押し、壁に寄りかかる。『アルデバラン』のエレベーターとは違い、とても静かに動く。数秒の後、目的の六階に着く。歩きながらトートバッグの中を探し、家の鍵を取り出す。千佳はいつも決まった内ポケットに鍵を入れているので、取り出すのに迷うことはない。家のドアの鍵穴に鍵を差込み、回す。かちゃり。ドアを開けて滑り込み、夜を、閉じる。鍵もきちんと。かちゃり。

部屋に入ると千佳は、トートバッグを椅子に置いた。カーディガンも脱いでその椅子にかける。腕時計をはずしてテーブルに置くと冷蔵庫へ向かう。一人暮らしには大きな冷蔵庫を開けると中はがらんとしていて、入っているものと言えばエビアンの大きなボトルが二本と、ロゼワインのパックが一本、オレンジジュースが一本。タッパーに入った料理が数点。タンブラーにエビアンを注ぎ、扉を閉める。一口飲む。それは冷たく身体に染み渡った。大きく息を吐く。自然と。ミネラルウォーターの入ったタンブラーを持ったままベッドへ向かう。飲む。向かう途中でタンブラーの中身は飲み干してしまったのでテーブルにタンブラーを置き去りにする。本棚から適当に一冊取り、ミニコンポの再生ボタンを押す。Ｃｈａｒａが囁くような声で歌い始める。深夜なので音量を下げる。

服も化粧もそのままに、千佳は本を手にしたままベッドへ身体を投げ出した。うつぶせ。残念、眠くはないようだ。寝返りを打って仰向けになる。本の適当なページを開こうとすると栞が落ちてきて、それが読みかけの本であったと気付く。栞が挟んであったページを開く。猟師が身体にクリームを塗る場面であった。少しページを戻してそのお話の最初から読み始める。何度も読んだ本だ。何度も、何度も。好きな本だ。

本当に欲しいものは、気付けばその手の中にあることが多い。手に入れたことを忘れてしまっているだけで。欲しいと思っていたことを忘れてしまっているだけで。出会うことは偶然だけれども、必然だ。少なくとも千佳はそんな人生を歩んできた。この部屋にあるほとんどのものは千佳が選び、置いている。この部屋で過ごす限り、千佳が欲しいと望もうが望むまいが、千佳好みのものが手に入る。そういう風に生きてきたのだから。

寝転んだままページを捲る。ほとんどの文面はもう暗唱できる程だが、千佳はあえて目で文字を追う。ゆっくりと。じっくりと。ページを捲る速度はだんだん落ち、やがて止まる。穏やかな寝息が聞こえる。

　空が明るくなってきたことで千佳は目を覚まし、時計を見た。六時。眠くなかったはずだったが眠ってしまっていた。七時になったらパンを買いにいこう、タマゴサンドを買いにいこうと思った。家から最寄の駅に隣接してパン屋が営業していることは把握していたから。
　千佳は服を脱ぐ。シャワーを浴びようと思ったのだ。全裸になって、ブラシで髪を梳かす。脱いだものを抱えて洗濯かごに放り込む。バスタオルを取り、浴室へいく。給湯器のスイッチを入れ、シャワーの蛇口をひねると冷たい水が出た。左手で出てくる水を確認していると、しばらくして熱いお湯が出始めた。朝に浴びるシャワーは熱めのほうが良いと千佳は思っている。肩から始めて全身くまなくお湯を浴びる。シャワーをフックにかけ、クレンジングオイルを手に取る。手に広げると、目元から顔全体になじませ、くるくると細かく手を動かした。手でシャワーからの流水を探し、まず手を流す。流し終わったらシャワーを手にして顔に直接お湯をかける。かけながら指で軽く顔をマッサージする。顔を流し終わったら、おでこから頭全体にお湯を浴び、シャワーをフックに戻す。化粧石鹸を取り、手で泡立てる。両手のひらにこんもりと作られた泡に顔を埋め、手と指で細部まで丁寧に洗う。おでこの生え際や耳の下、小鼻の横まで丁寧に。シャワーでそれを流し、今度は髪を洗う。シャンプーを手に取り、少しお湯をなじませてから頭に持っていく。頭皮をマッサージするように指の腹で念入りに洗う。頭の上でよく泡立て、髪全体を泡だらけにしてからお湯で存分に流す。コンディショナーを取り両手に広げて、手櫛で髪の隅々までいき渡らせる。これもお湯でしっかりと流してしまう。ボディタオルを取る。シャワーのお湯で濡らし、ボディソープをかけた後、こすり合わせて泡立てる。もこもこの泡の塊ができたら、それで首筋、肩、と今度は身体を洗っていく。背中やひざの裏や足先もきれいに洗う。
　全部洗い流したかった。『チェリーブロッサム』での会話も、ホテルでの男の唇と指の感触も、『アルデバラン』で見たことも、全てきれいに洗い流してしまいたかった。
全身が泡だらけになる。ボディタオルを持った手だけをシャワーにかざし、先にボディタオルを流して絞り、壁のフックにかける。泡が消えた手でシャワーを持ち、全身に浴びる。泡は流れ落ち、床の上を滑り、排水溝で渦になる。全身の泡が落ちたら、もう一度化粧石鹸を泡立て、軽く手と顔を洗う。シャワーで流す。最後に頭の天辺からシャワーを浴びる。少し上を向くとおでこを中心にお湯が全身を伝った。千佳は、自身がきれいになれたという錯覚を手にすることができた。新しい生き物として生まれた気がしていた。

　バスタオルで身体を拭きながら浴室を出ると、千佳は自分が思いのほか空腹であることに気が付いた。肩からバスタオルを羽織った裸のまま、テーブルからタンブラーを取ってきて、冷蔵庫を開けてエビアンを注ぐ。ごくごくと飲む。一杯では足りず、もう一杯注いで、これも飲み干した。タンブラーをシンクに置き、下着を身に着ける。クローゼットから黒いジャージーのパンツとオレンジのポロシャツを取り出して着る。ベッドに腰掛けて髪にドライヤーを当てる。熱風が髪をぐしゃぐしゃにする。五分ほどで千佳の髪はほとんど乾いた。たっぷりの化粧水を手に取り、顔に軽く叩き込む。ドライヤーを片付け、時計を見ると六時五〇分。予定より少し早いが

、もう出かけても良いだろう。カーディガンを羽織り、財布を手に持つ。サンダルを履いてパンを買いに出かける。家の鍵はジャージーの左ポケットに入れた。

晩夏とはいえ、朝の空気はピリリと引き締まっている。新鮮な空気が心地良かったので、千佳はエレベーターを使わず階段で降りていった。千佳は朝の空気が好きだ。マンションから駅まではゆるい下り坂なので、ゆっくりと歩いた。土曜の朝は静かでとても良い。のんびりほっこりした心持ちでパン屋に向かう。風が吹くと、整髪料をつけていない千佳の髪がふわっと流れた。朝の日差しが、眩しい。

パン屋には小さな男の子と女の子を連れた若い父親と、老夫婦の二組がいた。子供たちの肌はぷりぷりとしていて、頬が赤い。二人で取り合いながらも、小さな手でトングを一生懸命に扱っている。見ていた千佳は危なっかしいな、と思った。男の子はコロッケサンドを取り、女の子はクリームパンを取った。父親がトレイとトングを受け取り、メロンパンとカレーパン、チーズフランスを追加してレジへ向かう。老夫婦はご夫人のほうがトレイもトングも持っていた。旦那さんがぼそっと喋ると、ご夫人はにっこりして細い手で持ったトングを操りパンを取る。それを幾度か繰り返してから、レジを待つ。それを千佳は微笑ましいと思った。

千佳もトレイとトングを手に持つ。まずはタマゴサンドをトレイに載せる。ぐるりと店内を見渡し、アンパンを一つ追加した。子供たちがキャーキャー言いながら家族連れは出ていった。千佳はドリンクの冷蔵庫からパックの牛乳を一つ取り、それもトレイに載せてからレジへ持っていった。ちょうど老夫婦の会計が終わったようだった。レジのおばさんは、まだ朝も早いというのにきびきびとした動作でパンを袋に詰めていった。「おかみさん」という言葉が似合いそうな明るい笑顔が気持ち良かった。

パン屋を出るともう日差しは夏のものだった。ツクツクボウシも鳴き始め、夏と秋の境目の、けれど確かに夏の空気だった。ゆるい坂を今度はゆっくりと登る。千佳は日焼け止めを塗っていないことに気付いたが、カーディガンも羽織っているし、と思い直した。急がない。朝を胸に吸い込みたかった。

歩きながらベーカリーショップを立ち上げたときのことを思い出す。最初に企画したのは聡子だった。社長であり夫である黒木に言うより先に千佳に相談してきた。黒木と対等に喋れるようになりたいの。真意は千佳にはわからなかった。けれど、聡子に頼りにされるのは気持ちが良かった。聡子の思いを丁寧に聞きながら、千佳はベーカリーショップに並べる商品を考えた。素朴なものがいいと思った。優しい味のものがいいと思った。開店が迫ったころに、聡子が定期的に婦人科に通っていることを知った。

マンションに着いて、少し悩んだが、やっぱり階段で六階まで上がる。着いた頃には僅かながら息が切れていた。ポケットから鍵を取り出し、部屋に戻る。パンの入ったレジ袋はテーブルに置いた。カーディガンを脱いで椅子にかけ、窓を開けて網戸を閉める。千佳は洗面台へ向かった。

洗面台から出る冷たい水で手を洗い、そのまま顔も水で洗った。さっぱりとして気持ちが良い。タオルで顔と手を拭き、テーブルに戻る。レジ袋から中身を取り出して並べた。牛乳、アンパン、タマゴサンド。千佳はタマゴサンドを手に取り、覆っているセロファンを剥いだ。剥ぎながら、昨夜のカーディシャンの手を思い出す。思い出したけれど、その記憶と共にタマゴサンドにがぶりと齧り付く。おいしい。幸福な朝食だった。

栄養がどうのと言う前に、「おいしい」ということはとても大事だ。必要な栄養素かどうかは身体が一番わかっている。炎天下で働く工員が塩を舐めておいしいと感じるように。お酒を飲んだ後で食べるラーメンが過剰においしいように。「おいしい」と思うこと、思えること、それ自体が栄養になる。身体が求めているのだ。頭や意識でどんなに必要なのではないかと考えてもだめ。身体は正直で、素直だ。おいしい食事。楽しい物事。身体が求めるものはその身体に必要なものなのだ。

このタマゴサンドはおいしい。千佳の舌で探る限り、特別な材料は何一つ使われていない。単純にパンがおいしくて、品の良い加減でバターが塗られ、マヨネーズとタマゴを和えた具もおいしい。ゆっくりと噛み締めながら食べる。おいしいものはじっくり味わうのが千佳流だ。おいしい。おいしい。自身の身体が求めていたのはこれなのだ、と千佳は確信を持つ。意識が口の中に集中する。身体全体の感覚を使ってタマゴサンドを食べる。やっぱりおいしい。

その後、千佳は牛乳パックにストローを刺して飲み、アンパンにも噛り付いた。タマゴサンドもおいしかったけれど、牛乳もアンパンも、おいしかった。千佳にとってすばらしい朝食だった。最後にズズズッと牛乳を飲み干して、朝食を終えた。

食べ終わったゴミを片付けながら千佳は、この後は寝よう、ぐっすりと気が済むまで眠ろう、と思った。食べたもの全てが、身体で受け止めた全てが、この身に付くように。全てが千佳自身

の糧となるように。黒木夫妻のように幸せなふくよかさを持った自身の姿を思い浮かべながら、千佳はベッドで横になる。

――おわり

グラスに冷たいギミックを

著者 ： kuresaki （ｃａｇｅ）
表紙デザイン ： むーん （ｃａｇｅ）

ｃａｇｅ ： we must Control our AGgressive Emotions.
http://cage25.seesaa.net/

Copyright (C) 2011 ｃａｇｅ All Rights Reserved.
powered by ブクログのパブー （株式会社paperboy&co.）